

後藤梨春『震雷記』『雷震記』翻刻

■凡例

○底本…国立国会図書館蔵本（請求記号：特 1-3436）。

※「国立国会図書館デジタルコレクション」より閲覧可能。

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2537097>

○表記…

- 一、漢字・仮名は通行の字体に改めた。なお、「庵」「菴」、「総」「惣」、「島」「嶋」、「編」「篇」、「竜」「龍」、など一部の漢字は底本の表記に従った。
- 一、濁点・半濁点・句読点・中黒（中点）を適宜補い改めた。堅点は省略した。
- 一、畳字は「ゝ」「く」「々」などで表した。なお、漢字一文字分に対して使用された畳字は「々」に改めた。
- 一、平仮名の合字はひらいた。
- 一、割書は「へ」で表し、改行は反映していない。
- 一、不審箇所にはルビに「(ママ)」を付した。
- 一、左訓はルビに注記を施した。
- 一、文字の入力が困難な場合は「□」で表し、ルビに注記を施した。
- 一、図画が掲載される丁には当該丁の URL を貼付した。
- 一、原則として追い込み処理を施したが、明らかに段落を変えている箇所や闕字は底本どおりに翻刻した。
- 一、丁移りは、「（丁数オ／ウ）」で表し、丁数は原則として底本の丁付に従った。なお、丁付の漢数字は算用数字に改めた。

○備考…

楠瀬恂編『随筆文学選集』第七卷（書斎社、一九二七年）に翻刻が備わる。『震雷記』に就いて」として、以下の解説を付している。

明和二年七月二十二日に相州大山に落ちた雷獣、及び加賀白山の雷鳥について詳記し、伝説を加へ、陰陽説に結び付けて説述されたものである。

本書は小精盧蔵本の明和四年、東都に於いて開板された半紙判の一冊本による。

なお、同書は一部ルビを省略して翻刻しており、また誤植も散見されるため、参照に際しては注意されたい。

※本稿は科研費・基盤（B）「近世随筆」の領域横断的研究」（課題番号 22H00638、代表者・川平敏文）による研究成果の一部である。

■翻刻

震雷記

東都躋寿館都講 後藤光生梨春 纂輯

教授 宮城超安

教授 石冢元常 同鑑

教授 小篠公安

明和乙酉秋七月下旬、雷震^ニ於相州雨降山^ニ。雲雨晴散忽見^ニ一獸^ヲ。其貌似^レ鼬^ニ而甚大色少黒。長自^レ頭至^レ尾^ニ二尺五六寸許。相伝此物、天晴明^{ナレバ}則溫柔而可^ニ馴^レ參^一、^{（1才）}天陰^{レバ}則躁動而不^レ可^レ近。土人捕^ニ之籠^ニ著^ニ於東都両国橋^一、使^ニ人得^レ縦^ニ觀^一之^ニ。余^モ亦就而視^レ之^ヲ。因写^ニ其^ノ真^ヲ、而授^ニ幼童^一矣。按古人説^レ雷、未^レ有^ニ確論^一。上古姑^ク置^レ焉^ヲ。自^レ漢以降、諸儒僉言。雷者陰陽^ニ二氣、逼而發声動揺^{スル}而已。余謂陰陽^ハ有^レ名而不^レ可^レ觀。其^ノ理不^レ可^ニ得^テ而尽^ス焉。故^ニ學者往往疑惑^ス焉。況庸俗^ヲヤ乎。其^ノ後西域天学家、利泰西周庵之徒出新設^ニ雷^ノ説^ヲ。雖^レ似^ニ稍易^ニ曉、未^レ至^ニ其^ノ壺奥^ニ也。近世有^ニ原省菴之發明^一。曰^ク夫雷者陽氣誘^ニ地氣^ヲ而升^レ天、則其^ノ地中之硫黄焰消共^ニ升而至^ニ于天^ニ、則太陽之天火乗^レ之、交^ニ入空中之水雲^一、而忽發声奔騰^ス。是^レ則造化之^{（1ウ）}火^{（左訓ニテツボウ）}銃也。其^ノ説可^レ謂^ニ未曾有之詳説^一者歟。又別有^下好^ニ此^ノ火氣^一獸与^レ雷火俱^ニ遊^ニ行雲中^一、而遇^々隕^中人家^上。則俗以為雷亦彼所^レ為也。可^レ謂妄^{ナリ}矣。王充論衡載^レ雷形有^ニ連鼓之語^一。王充亦本^下於周礼^ニ云雷鼓八、及楚詞九歌、駕^ニ龍輶^ニ兮乗^レ雷^ニ之語^上歟。夫品物之博也、食^レ火之獸、食^レ火之鷄、処^レ火之鼠之属^ヒ、不^レ可^ニ枚舉^一。或^ハ又不^レ棲^ニ於山林人家^ニ、有^下常^ニ飛^ニ行^{スル}于雲中^ニ之鳥^上。藻塩草所^レ載、天燕、一名雨燕、江寧府志所^レ載、雲霧鳥之類、近世番人稱^ニ風鳥^一者、皆此ノ類也。真^ニ字内之博、品物之宏、不^レ可^下以^ニ一片識^一而論^上焉。

躋寿館総理 大洲田

澄元 参訂^{（2才）}（空白）^{（2ウ）}

明和乙酉七月廿二日相州大山に落る雷獸（雷獸図）^{（3才）}

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2537097/1/4>

加賀国白山の雷鳥（雷鳥図）^{（3ウ）}

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2537097/1/5>

伝聞、いにしへの聖人は麒麟を獲て筆を留め給ぬと。今やつがれば雷獸らいじゅうを得て筆を取始めぬ。末世といふ賢愚のたがいケ程まで異なるにや。是といふも陰陽造化あんやうぞうくわの別れ行有様心をとめみるに、こよのふなぐさむわぎなれば、心に思ふまゝ口に出るまゝ書つゞりて同志の友に送り侍りぬ。

天地の開し初より日月星辰雨露霜雪風雲といへるもの有て万物を化育くわいくす。其内ひとり雷霆らいていといへるものありて、其（4才） 形容けいよう烈く人々忌遠いみざく。是も造化の一物なれば、暗あんに万物を化育するの徳ありと見えたり。しかれども氣弱の人・幼婦ようふのたぐひは殊におそるゝものまゝあり。ひそかにあんずるに、雷は地の陰氣より発して陽氣をかり其たいをなす。陰氣の甚究竟なるものと見えたり。故に陽有余陰不足の人はおそるゝ事少く、陰有余陽不足の人はおそるゝ事甚し。甚畏るゝ人をかぞをるに、十人に一二人のみなり。ま（4ウ） ことや、朱丹溪しゅたんけいの陽有余陰不足の論をたて置くゝも宜なるかな。医門にかゝわる人よくゝ此利を推察せずんばあるべからず。かるがゆへに聞レ雷ラ昏倒こんたうする人には人參・当歸・麥門冬・五味子、右四味せんじ用ゆる事楊起やうきが簡便方に見えたり。これ陽不足なる症ゆへ、此陽氣を助けるがための主方なるべし。是のみにかぎらず、雷霆のためにうたれ氣絶する者には附子一味を煎じ用るといふ。いまだ出所見ずといへども（5才） 是も又絶する所の陽氣を引かへさんがための術なるべし。いま喻嘉言ゆかげんが尚論篇けみを閲するに、附子一味をもつて陰躁を止めるといふ語あり。これによつて考るに、雷にうたれたるものは陽氣減消して陰氣のみの病をいへる故、ゆへに元陽をかへすに附子を用るにや。ことに彼書に霹靂散へきれきと名付しも雷霆に昏盲する症に用るのこゝろにや。猶尋べし。此外俗方に雷発せんとするまへより氣（5ウ） 重く頭痛し、已に雷を聞ぬればいよゝ頭痛する症には、升麻・蒼朮・薄荷、右三味常のごとく煎じ是を服して則愈いゆ。又雷にうたれて氣絶したる者には病人をあをぬけ、胸腹の上へ活たる鮒ふをおき、彼鮒動揺どうようすれば忽ち蘇生す。又雷火のために皮肉を蔽やぶられ、腫痛には降真香を焼、此煙にてふすぶるときは多は汁流つきて忽かわきいゆ。

○惣じて雷を畏るゝ人俗間にいろゝ（6才） の咒まじないあり。庭中え桑の木を植。夫桑は神木といふ伝へ、殊に桑の弓を以て邪鬼を払術もあれば雷よけにもなるべし。又木さゝげといふ木も同じく雷を避く。是は梓木ししの一種にて功能すぐれたる木なり。羅願らぐわんが爾雅翼じがよくに屋室をくしつの中に梓壺本はしらに有れば余材皆震せずといふ故に異名をも木王と名く。又七竈なゝかまどといふ木をも植。是は漢名いまだ詳かならずといへども、七は陽数、竈は火氣を（6ウ） 貯る所なれば、陰邪を禦ふせがん為の咒なるべし。又南天を植るも南方火徳を表し、其実の赤きも火の色なるゆへ、陰火を禦がんがためなるべし。又加茂葵を所持する人は雷にうたるゝ事なしといふ伝ふ。謹まことに加茂の御神は別雷わけいかづちの靈社れいしゃと承れば、其靈社より分ち恵たまふ神符なれ

ばさも有べきにや。殊に加茂の葵は細辛の一種なるよし、怡顔齋いがんさいの用藥須知に載たればさもあらんか。夫細辛は氣（7才）味辛く温（つや）にし陰氣を禦ぎ、殊に暗風・卒倒などにも細辛の末を鼻に吹く時は忽ち蘇生すと危氏きしが得効方に載たれば、是なども雷にうたれたる時の用藥たるべし。此外あらゝ木、一名伽羅木・やしやびしやくなど庭中に植て雷を避べし。又家内へはる守護あり。東方に阿陀迦鬼、南方に奢帝盧、西方に修陀光、北方に蘇陀磨拏、右の通書付、家の四方に張るべし。此神符（7ウ）高龍山報恩寺より出る守なり。惣而此正説本抛なき事もあれども、咒類は其氣をなだめんためなれば俗説に伝る事も何れも用ゆべし。其効なくんば有べからず。

○まへにもいへるごとく、雷霆の時雲に乗、落るときも隨て落る生類、和漢色々種類多と見えたり。今年明和乙酉七月廿二日相州大山に落たるは其形猫よりは大きく、かたち略鼬に似て、色鼬より（8才）黒し。爪五本ありて甚たくましく、先年岩付に落たる雷獸は大体今年のに似たりといへども胴短く色灰白色なり。唐の書にも往々見えたれどもいづれもたがい多し。唐の狄仁傑てきじんけつがかたち人に似て、殊に人語をなせしといへり。又李肇りが国史補に曰、雷州に雷獸多し。其かたち人に似て、人是をとつて食ふといへり。搜神記には雷のかたち獼猴に似て色赤といへり。我国にも土佐の国には（8ウ）春夏の比山中にて雷獸を討取食ふ。其味星鮫ほしざめのごとく甚美なりといへり。又信濃深山にも此ものをとり食ふ。房州二山といふ所には正二月比村民いゝ合て雷獵がりとて山中を獵出し取るといへり。しからざれば其年夏秋雷多しといゝ伝ふ。寺嶋氏の三才図会に詳にのせたり。又加賀の国石川郡白山権現しら、一名妙理権現、此山中に雷といふ虫あり。大サ略蛙のごとくして、春中夥おほく出る年は其年（9才）雷多きゆへ村民見つけしだひこれを取殺といへり。又此権現の山に鳥あり。彼雷といへる虫を甚好み取食ふゆへに此鳥をも雷鳥といゝ習せり。其鳥のかたち鳩よりは太く惣身黒く朱冠あり。鷲めんどりは斑文はんぶんありてかしわ鷲の斑ふのごとし。此鳥松岡氏云、大明一統志に載る所の松鶏なりといへり。大明一統志にも古本には松鶏とあり。校正の本には（入カ不可…章十應）□ 鶏とあり。此鳥常に松樹の内に棲ゆへ松鶏に（9ウ）充あてたるか。されば古歌にも、後鳥羽院の御製とて、白山の松の木かげにかくろひてやすらにすめる雷の鳥かな、又家隆卿の歌に、あわれなり越こしのしら根に栖鳥すむも松をたのみて夜をあかすかなとよめり。いづれも松によそへたり。されば享保のはじめ、飛弾（44）の国乗鞍のりが嶽といふ所に此鳥多くあるよし聞召及れ、有司に命ありて数十羽御取寄のよし。餌飼たがいぬるや、多はおち（10才）たるとぞ。餌袋を割みるに皆松実有しゆへ松の実をもつて飼けれども漸東都へは六羽ならではまいらぬよし。是も風土のたがいや、間もなくみなおちけるとぞ。此鳥陳眉公ちんびこうが秘笈ひきうの中に太平・清和といふ書あり。其中に灶神そうじんといふ鳥あり。朱冠・鳥衣とあれば、うたがふらくは此鳥なるべし。

灶神は竈かまどの神なれば竈は火を司るの神霊なれば雷にも縁あるにや。今「(10ウ) 吾国に俗間荒神の画馬とて鶏をかけるも、うたがふらくは此灶神の誤なるべし。

○惣じて雷の落たるあとに雷の爪、一名天狗の爪、其外色々のかたち有ものあり。世間に天狗の爪といふ物あり。所々の深山幽谷ゆうこくにて稀に拾ひ得るといふ。其状小きは一二寸、大きなるは三四寸、本厚く末尖り両稜刃のごとく極て硬く重し。色白く末は青黒くして光沢あり。

又鴉くもばしの觜くちばしに似て「(11才) 斑なるもあり。表は甲高く裏は平なり。本のとまりはこぐち陶器薬をかけ残したるやうにて松茸の根の色あひに似たり。是を天狗の爪とのみいひ伝て何の成れる物といふことをば知らず。或人のいへるは、此物雷の落たる辺または其処の地を堀て得る物なる故に西国にては雷の爪といふと。然らばすなはち唐の陳蔵器ちんざうきが本草拾遺に、霹靂ちん礎ちんの中に剗刀ざとうに似たるものあり。色青黒く「(11ウ) 斑文にて至て硬く玉のごとしといへる物、雷震の後に因て得るとあれば是なるべし。又阿波の人のいへるは、元録(ヤ)の比、阿州津田山に雷の落たる跡にて種々の異物を得たり。一種は長さ三四寸、かたち三絃の撥ばちに似て、色は尹部いんべの陶器やきものなどのごとく紫黒しこくにして石よりも硬しと。是即張華ちやうくわが博物志に載るところの霹靂ふ斧ふ、一名は霹靂楔けつといふもの、又蔵器が霹靂礎ちんの斧刀に似たるものと「(12才) いひ、又沈存中が筆談に、雷の落たる木の下にて雷楔を得たり。斧に似て孔あななしといひ、又時珍が雷書を引て雷斧は斧のごとしといへるものなり。又一種は経(ヤ)二寸許にて、形は禅僧の掛羅くわらにかくる環くわんのごとく、色白く少し青みありと。是すなはち雷書に出たる雷環なり。又一種は長さ四五寸、かたち牛の角のごとく、色紫黒にして末の鋭うす青く、本は右にいふ天狗の「(12ウ) 爪のごとく至て硬きものと。これ又雷書に、雷鑽さんは長さ尺余、銅鉄のごとしといふものにや。亦世間に天より降たる劍など、云伝ふる物あり。これも雷鑽さんの類なるべきか。又大坂の人、先年安治川あぢにて雷のおちたる跡の泥中より得たると一塊掌の大きにて乾漆かんしつのごとく石に似て石にあらず。これ劉恂りうじゆんが嶺表録異の雷公墨といふものか。其外雷礎・雷鎚・雷珠等色形かはれども悉く此種類「(13才) なり。いづれにてもこれを珮はれば神を安じ志を定め驚邪きやうじやの疾を治すとあり。さて本草綱目に李時珍粗其事を弁ずといへども、いまだ其理を尽さず。愚按ずるに、それ地氣升つて雲となるときは質変しつへんじて氣と成り、天氣降つて雨と成るときは象化しやくわして形となる。こゝを以て地の氣升る時湿土・金石の氣誘はれ騰のぼりて雲となりたるが、天の氣の降る時に其氣雷火に鑄み成され「(13ウ) て造化の磁器・鑄(左訓・あもの)物と成りたるものなり。〔右に云、雷鑽(左訓・かたち)の類是也。〕天は陽なる故に天に在る物は氣象として目には見ゆれども容(ヤ)体(ヤ)なき物、地は陰なる故に地にあるものは形質として手にとらるゝ容(ヤ)のものなり。此故に陰陽の氣の降り降りする時天地の氣に親みて万物變化することなり。さるによりて邵子全書に曰、天の四象は日月星辰、地の四象は水火土石と。こ

れ玉にて日の火をうつし、月の水を取るにて知るべし。」(14才) 春秋に、星隕て石となる
 とあるも此理なり。へ人の身にも神と気は陽にてかたちなし。精と血とはかたちあるなり。へ
 ○また雷の隕たる跡に樹木或は柱などに文字のすはり有事あり。是を雷書と云。五字十字或
 は二十字書るもあり。中華には度々有之由往々典籍てんせきに載たり。其文字の内、多は謝仙火の三
 字とかく備る事これ又一奇事なり。くわしくは北山医話に出所を書出し載せ侍るゆへ是に
 略す。惣じて雷の隕て」(14ウ) 樹木なぞうちさきこがれたるを雷震木と名づけ、心気の
 弱きものなど雷におそるゝ人など守りに用ゆ。又此雷震木を家の内に貯ふれば火災を避る
 よし本草に見えたり。されば雷は陰火なれば陽気の火を禦ぐ理なり。故に雷火にて家居の焼
 升る事あれば陽火をもやし、うちつくれば忽ち消。又灰をかけても消よし。陰陽互に相制す
 る自然の妙なり。

右之条々雷を畏るゝ人のために聞伝」(15才) 侍るを書のす。雷を畏るゝ人は心肺の血液
 少き人にあり。かるが故に素問にも雷氣通つうす心しんとあり。又肺は金氣にて火に剋せらるれば
 其理さも有べし。かやう成症には生脈散膏を常に服して其しるしを得たる人多し。其外、古
 今医統・本草綱目等にも治方色々出たれば猶参考すべし。」(15ウ)

梨春先生編輯書目	梧陰菴
合監本草	三十卷
随觀写真	三十卷
本草綱目会読筌	十三卷
本草綱目補物品目録	二卷
同後編	三卷
都老子	四卷
龍宮船	四卷
採藥使記	二卷
春秋七草	一卷「(才)
紅毛談	二卷
同附録	一卷
甘蔗記	一卷
尺八志	一卷
大便経	一卷
河豚禅	一卷

しのぶ草

一卷

梧陰卮言

三卷

震雷記

一卷
〔ウ〕

明和丁亥春上元日不貪山人写於銭神宮中

東都日本橋

須原屋茂兵衛開版〔オ〕